

【翻訳】

インターネット時代における 博物館と文化財情報ネットワーク

Museum Information & Cultural Heritage Network in the Age of INTERNET

ヤニ・ヘルマン (Yani Herreman)

水嶋英治* 訳

(訳者まえがき)

米国最大の博物館情報に関する研究・普及機関である「ミュージアム・コンピュータネットワーク」(Museum Computer Network)の定期総会が1994年8月28日、ワシントンDCで開催され、訳者も毎回この会議に出席している。本稿は、この大会で基調講演をおこなったメキシコのヤニ・ヘルマン女史(ICOM 執行委員)の許可を得て訳出したものである。

社会全体が情報化へと進展していく中で、自国の文化をより鮮明にし、自国のアイデンティティを保持していくためには一体何が必要なのであろうか？

そして、自国の文化開発のためには情報ソースとしての博物館や博物館データの活用をどのようにしていくべきか、あるいは文化財のネットワーク化や文化振興政策についてどのような観点から議論を進めていくべきか……。情報化時代を迎え、インターネットを利用した情報の受信と発信機能など、ヘルマン氏の講演から学ぶ点は多いように思う。博物館関係者のみならず文化・教育分野の関係者と共に考えたいテーマであるため訳した次第である。講演のテーマは次の6部から構成されている。

1. はじめに
2. 文化遺産とアイデンティティの問題
3. 情報システムとドキュメンテーション

4. 国際機関：ユネスコとICOMの役割
5. インターネットと文化産業
6. 結語：文化政策とネットワーク化に向けて

(ヤニ・ヘルマン基調講演)

1. はじめに

この基調講演を依頼された時、私は直観的にノーと言うほかありませんでした。ドキュメンテーションのスペシャリストや専門家を前にして、私は情報科学の専門でもありませんから無理だと思ったわけです。しかも、現在、何が、進行しているのか正確に把握していないのが本当のところでは。とは言え、よく考えて見ると、博物館分野における私の経験は数年間に及びますし、しかも文化情報システムに関して熱狂的なくらいに仕事をしてきたので、少くくなら話題提供してもいいだろうと気持ちが変わり、講演を引き受けようとの結論に達しました。

一方、私は国際博物館会議(ICOM)の執行委員会の一人として、地域と地域の間に文化的な架け橋を築くことに興味をもっています。ですから、この機会を利用して、私が本当に期待していることを皆さんと一緒にアイデアを交換しようと思ったのです。もう一度繰り返しますが、この講演の中で技

*みずしま えいじ

科学技術館学芸員 (現在、ラ・ビレット科学産業都市国際開発局勤務)

術的な情報が欠けているとご批判されるかも知れませんが、その点はご容赦いただきたいと思います。私の基本的視点から、あるいはアウトサイダーとして言うのかも知れませんが、博物館や文化財さらには文化財情報を今回の話で取り上げる点では、おそらく皆様に興味ある内容だと思います。

さて話を始める前に、私は本大会を計画した関係各位に対し、労いの言葉を述べたいと思います。地球的な規模で考えている国際博物館会議ドキュメンテーション委員会 (CIDOC)、Getty・アート・ヒストリー・プログラム、そしてミュージアム・コンピュータネットワークの努力は電子的なコミュニケーションばかりでなく、文化的にも異国の人々とコミュニケーションする機会を提供してくれる実現可能なプロジェクトだと思います。ですから、さらなる発展を期待しております。

2. 文化遺産とアイデンティティの問題

では、本題に入りましょう。

「文化遺産とアイデンティティの問題」、これが第一のテーマです。この問題は、その他の問題と関連されるべき論点のひとつで、私が特に重要だと考えているものです。理論的に、哲学的に、しかも倫理的に、考察しておかなければならないテーマであると思います。今日のように、社会的な変革が急進的に進行する中でおこる劇的な経済対決……、その代償として得られるものは一体何でしょうか。それは文化的な破壊です。このような社会的な変化の中では、文化と文化遺産はより一層重要な役割を果たします。

ベルリンの壁の崩壊、冷戦の終結、南アフリカでのアパルトヘイトなど、私たちは劇的な出来事に直面しています。これらは全体主義な思想から民主的なシステムへの変革と言うことができます。しかしながら不幸なことに、現在でも多くの国の間で、あいかわらず戦争を繰り返し、諸宗派間の闘争をしていることも事実です。パトリック・ボイルンが言うように、「国際的な紛争と民族間の内紛によって、民族的、地域的な文化財を失う主たる原因が今だに存在している」のです¹⁾。

人類が発達してきたのは、もちろん経済成長が

あったからですが、しかし同時に、この経済成長の名のもとに、私たちは文化遺産を破壊してきましたし、この破壊活動を常に見続けてきています。それは、文化価値のより鋭い感性がそがれ、死者に対する悲しみの泣き声をあげているようでもあります。

文化と文化財は民族に欠くべからざる基本的なもので、アイデンティティを強めていく極めて重要なものです。われわれ人間にとっては、どのような民族であれ、宗教であれ、全体として見れば重要です。なぜなら、自分たちを他人と区別できるのは文化と文化財だからです。マルタ・アルジョナは「文化遺産はコミュニティと密接に関連している」と述べています²⁾。

文化それ自体は、事物の総体として存在しています。価値あるものとしてそれを選択し、地域社会の一部分として保持していこうと決断できる時一たとえ機能を果たさなくなっていたとしても一、文化に対して本当に価値を与えることができるのはコミュニティ次第であると言えます。文化的な遺産の役割と意味は常に変化しています。社会の発展とその統合化された行為は、現代の人類学と社会学的な研究の下で再評価されているのです。

文化遺産を保護していくことは、今や、融和的な連鎖現象として見られはじめているとも言えます。つまり、コミュニティの記憶とその将来の間に、人間と自然現象の間に、開発・成長と伝統の間に、モダニズムとアイデンティティの間に、地域化とグローバル化の間に関与しています。

この最後の問題、グローバル化と地域化の問題は議論の余地があるかもしれません。後ほど話題提供するように、一般的な文化情報と、特に博物館情報の電子システムに関しては議論的になるでしょう。今世紀末のひとつの特徴として、コミュニケーション技術によって文化と文化の間には強い相互関係があることは非常に明白です。今日では、真の普遍的な文化を形成するべく、地球的規模で知識を拡めていこうとする強い傾向があります。もしこの傾向が続いていくとすると、どのようなのでしょうか。文化と文化が均質的になるのでしょうか、ある

いは、ある文化を他の文化に押し付けることになるのでしょうか？そうではありません。反対に、文化的な情報が真の意味で交流を持つことになるのです。

私たちは誰でもが現代の技術的な進展を信じていますし、それを必要と感じ、しかも発展することが望ましいと考えています。この技術革新によって、自分自身の文化的なアイデンティティが減少していくことは考えていません。文化という事象は、ダイナミックで、かつ永久に発展していくものであると仮定するならば、私たち自身の文化は他の文化と接触することによって危険にさらされるのではなく、反対に、私たちの文化アイデンティティを強化していくものだということがお分かるになると思います。つまり、私たちが文化遺産を持つことによって、アイデンティティと呼ばれる自分たちの必要基準を理解することになるのです。

文化は何物にも置き換えることができませんし、私たちの社会を形成する統合的要素ということが出来ます。ということは、公共施設、組織あるいは文化機関だけが責任を持てばいいというわけではありません。この責任性は文化財を所有する他のいかなる公共施設によっても共有されるべきであり、しかも同様にコミュニティによっても共有されるべきでもあります。後に再び述べることになりますが、私が最初にこの話を持ち出したのは理由があります。文化遺産を新しく再活性化させることは、「博物館」ひいてはドキュメンテーションと文化情報の分野において、現代的概念を再構築する基本方針となるからです。

一方、地域化という問題に相対立する「グローバル化」という概念は今回の講演の主要テーマではありませんが、やはり重要なテーマです。更にもうひとつの重要なテーマは「現在」のことよりも、近い将来に重要なテーマとなります。それは、文化政策の問題です。ドキュメンテーションと文化情報の発展には政策が関与しなければならなくなるからです。近年、経済発展と産業成長との関係において、文化の果たす役割が指摘されていますが、数年後に

その成長がスローダウンした時、文化は真の意味で重要性を獲得するようになるでしょう³⁾。1972年に、ユネスコが主催した文化政策に関する国際会議はメキシコで開かれましたが、私が今述べたように、今日の経済状況の中では、先進国だけでなく発展途上国にとっても文化政策と文化遺産の重要性がますます高まっていくと、その国際会議の中でも指摘されていました。経済的な観点からみても、文化と文化財は様々な「ビジネス」を創出し、あるいは少なくとも何らかの利益を生みだします。

これに対して、自国のアイデンティティを、あるいは地域のアイデンティティを明らかにしてきた効果的な方法は、政府に文化政策と文化遺産に対して鮮明な関心事項として認識させました。もちろん、これには博物館とコレクションが含まれています。第三世界の国々は、時に経済的あるいは政治的な状況に批判的であるにもかかわらず、これらの関心事項をさらに検討し、適切な法的規制を確立し始めました。アフリカ、アジア、アラブの国々の文化的なプロモーターや興行主は積極的です。たとえば、ラテンアメリカでは1993年、各国の政府はそれぞれの国の文化的なネットワークを開発・促進するべく強固にしました。なぜならば、国と国との文化的関係を強めることによって、北米の文化的な浸透を伴う経済的影響を受ける前に、地域圏の文化をひとつの能率的資源にしようと試みたからです。メキシコ政府はラテンアメリカ諸国の文化大臣を招き、共同事業を通して共通の目標を確立し解決策を見い出すよう話しあいました。このイニシアティブによって、幾つかの重要な計画が立ち上がりまし、これには文化的な情報に関しても含まれていました。

3. 情報システムとドキュメンテーション

さて、第二のテーマにうつりましょう。国際的にも非常に重要な文化政策は、各国政府の開発担当当局によって実行されるプロジェクトによるところが大きいと言えます。たとえば、スウェーデン国際開発局、ノルウェー開発公社、カナダ国際援助局や文化技術協力などはユネスコ、国際開発計画や非政府組織と同様、非常に重要で規模の大きい国際プロ

ジェクトを独立的に実行しています。最終的には、公共施設としての博物館は文化政策の重要な部分になっています。ですから、より華やかな演劇やオペラ、ダンス、大成功した展覧会などにくらべて、博物館が後手後手にまわっていたとしても、現在ではますます博物館が注目されているわけです。博物館や美術館は文化的に魅力あるものとして考えられ、国内および国際的な事業に含められているのです。

ヨーロッパの大規模博物館だけではなく、世界中のほとんどの博物館にあるコレクションは、真の意味で文化遺産として考えられています。妙に聞こえるかもしれませんが、可動性の文化財は、博物館コレクションも含め、現在でも多くの国々では返却要求に関して係争中であります。批難する人々も多くいますが、一般的にいうと、博物館は今を盛りとして繁栄しているので「開花状態」にあると言えますし、その数も増加傾向にあります。社会的な進化や経済的な景気にうまく適応するべく、博物館は伝統的な機能の枠組みの中で新しい潜在能力を出現しているといえるでしょう。よい例が博物館コレクションと博物館ドキュメンテーションの場合です。

「博物館に関する定義にはほとんど次のような用語を含んでいる。すなわち、研究、解説、保存、展示、調査、コミュニケーション、教育、見識、伝達、理解、指導……など。それらのすべては、データの収集、情報の交換と知識の創造活動を含むものである。」⁴⁾とされています。つまり、博物館は常に知識の宝庫であり、情報源でもありました。しかし今日では、電子技術の驚異的な発展のおかげによって、しかも社会全体が新しい情報を要求するようになった結果、過去数年の間には考えられなかった役割と可能性が現実になってきたのです。もはや夢ではありません。

たとえドキュメンテーションが常に博物館の主要機能と優先順位の高いものであったとしても、ドキュメンテーションは依然として学者、研究員、科学者たちにとって「自分の城」⁵⁾の中にいる状況にあります。でも今では、情報は博物館の内部・外部を問わず「強力な資源」になりましたし、世界的にも

ホットなテーマとなったと言えます。もちろん、これは情報産業の発展に由来しています。

国際博物館会議のドキュメンテーション委員会の会長アンドリュー・ロバーツは1990年に次のように述べています。「効果的なドキュメンテーションシステムと情報関連産業のおかげによって、博物館は今日の情報依存型社会において重要な役割を演ずることができるようになった」⁶⁾と。

ですから今日では、文化的な情報ハイウェイと地域の文化情報システムが存在していますから、数年後には、博物館はそれ相応に事業を展開していくことになるでしょう。

今日のドキュメンテーションは非常に複雑なプロセスになりつつあります。一方では、博物館の「目録」や内部用のコレクションデータベースの組織化のように、基本的な問題を内包していますし、その一方で、情報ハイウェイやテレビの方向性を決定する博物館の新しい役割の問題も含んでいます。この非常に広い課題領域は私たち博物館人にとって、難しい使命になるかも知れません。しかしピーター・ホミュロス⁷⁾は次のように言うのです。「博物館は個人的になった。が、これは私たちの共通した問題であって、個人個人が真剣に考慮し、共通の解決策を見付け出す必要があるのだ」と。

ところで、個人的な見解ですが、第三世界にある博物館の内部用の「目録」は開発させなければなりません。システムの標準化とネットワークを組織化することと同じぐらい重要なように思います。しかも、情報ハイウェイを通して博物館情報の利用に関しての国際的な規約が提案されなければなりません。これは当然やってしかるべきことです。なぜこんなことを私が言うのかといいますと、博物館ドキュメンテーションは世界各国のレベルと状況はバラバラだからです。ここで少し、世界の様子を概観してみましょう。

3.1. アフリカの状況

わずかに数年前に開催されたベニン、ガーナ、トーゴでの会議では、およそ120人の博物館の専門家が一同に会し、次のように結論づけています。「ベニンで開催された3日間の会議の後、関係者はアフリカの博物館が直面している現状の重要性を強調した。つまり、アフリカの博物館は概して博物館目録が無く、特別展覧会の開催、研究活動や収集作業も見受けられない。しかも、ドキュメンテーションが欠如し、あるいは整備されていない状況はアフリカの博物館の発展を妨げている」と……。この現状を改善するために、引き続きワークショップが開催され、次のような勧告と計画案が提案されました。すなわち、「われわれの文化遺産の悪化と消失には多くの理由がある。考古学遺跡での略奪行為、文化財の密売、極端な気候的環境、専門家の欠如などである。上記の点を考えれば、それぞれの博物館はコレクションの体系的な目録作成に着手すべきである。この目録はアフリカ大陸すべての博物館によって利用されるよう標準的形式によって記述されなければならない。技術的な援助と調整および実施状況を監視するためには、ICOM や ICCROM などの国際機関が関与することが望ましい。」⁸⁾

幸運なことに、アフリカでは共同事業として推進していることはひとつの解決策であると思います。問題の種類も違えば解決の道も違います。それにも、かかわらず、共通の答えを導き出そうとする努力によって過去数年の間成功しています。このように、いくつかの重要なプロジェクトが実行されていますが、そのうちのあるものは参加者の情熱によるものですし、またあるプロジェクトには ICOM や ユネスコ、あるいはカナダ文化財情報ネットワークなどのような国際機関の助言や協賛者もいます⁹⁾。これらのプロジェクトはゼロから出発したというができます。アフリカの場合、コレクション目録は ICOM の AFRICOM 計画の一部と位置付けられています、全アフリカ大陸の博物館を対象にして、向こう数年の標準化ハンドブックを創る計画からはじめています。このユニークなプロジェクトは国際博物館会議のドキュメンテーション委員会が重要な役割を果た

しています。

3.2. ラテンアメリカの状況

ではラテンアメリカの場合はどうでしょう。

ラテンアメリカ地域では不法密売からの保護に関して焦点が当てられ、1977年にチリのサンディアゴでユネスコ-国連開発計画 (UNDP) の主催する「ドキュメンテーション・目録に関する地域圏セミナー」が開かれています。それ以来、何回か会議が開催されています。ざっと振り返ってみましょう。

1979年、メキシコのアトリュエンツィアでは「文化財保護計画」のもとに文化財目録ハンドブックが準備されています。

1989年には、コスタリカで「目録に関するワークショップ」が開催されています。

1991年と1993年には、「ラテンアメリカとカリブ海の文化的遺産・自然遺産目録」に関するセミナーが2回ほど開催されました。

1991年のキューバ会議で採択された勧告は非常に重要なものでした。なぜなら、この勧告が提出された同じ年に第4回目の「ラテンアメリカ・カリブ海文化大臣会議」が開催されたからです。この会議の結果、国際博物館会議キューバ国内委員会から提案された考え方が次のように修正採択されたのです。

「ラテンアメリカの国々は文化遺産の保護のために目録を協力して確立すべきであり、この地域の文化的価値を高め、かつ情報提供が可能となるデータベースの構築も共同研究していかなければならない」¹⁰⁾。

アフリカの会議と同様、ラテンアメリカで開催されたすべての会議ではこの地域圏の繁栄と文化遺産の保護に関して表明されています。しかし、地域圏の共通目録システムの必要性が勧告されていましたが、実際はメキシコ政府の文化情報システムの参加とユネスコの援助が1992年に始動するまでは具体的な動きはありませんでした。

3.3. ヨーロッパの状況

以上述べてきたように、ここ数年来、先進国では

博物館ドキュメンテーションの分野が発展してきました。特に、データベース、ネットワークが開発されてきましたが、今日ではインターネットの活躍は目覚ましいものがあります。ところで、周知のように、ヨーロッパでは多くの団体によって開発されていますが、情報産業の今日の状況は、全欧州のうちオンラインによる収入はイギリスが52%と飛びぬけており、情報分野では事実上トップに立っています。マーケットリーダといってもいいでしょう¹¹⁾。

ヨーロッパでは、全体として、国レベル、地方レベルで博物館コレクションの自動化を図っています。データベース、博物館情報ネットワークは文化遺産の保護のために利用されています。しかも、これらの道具は地域の博物館情報ネットワークを創造するためにも利用されています。例をあげてみましょう。欧州博物館ネットワーク機構 (NEMO : Network of European Museum Organizations) は、現在、ヨーロッパ内で展覧会の開催や文化遺産を輸出入する際の法的整備を検討しています。これは東ヨーロッパとも連絡を取り合って進めています。ヨーロッパ視覚芸術センター (EVAC : European Visual Arts Center) は対話型マルチメディアの開発を共同しておこなっており、ビジュアルアートやデザイン分野で共通の目標を推進させるためにヨーロッパ視覚芸術情報ネットワーク (EVAIN) というコンソーシアムをつくっています。

3.4. 北米の状況

世界の中で、博物館情報やドキュメンテーションの分野でのリーダーはカナダです。カナダの国定プログラム (National Program for Canada) はカナダだけではなくアメリカをはじめ世界各国に影響を与えています。つまり、博物館情報の共同使用を実際に行なっているのです。1972年からすでにカナダでは博物館コレクションの国定目録を自動化しています。目下、カナダ文化財情報情報ネットワーク (CHIN) は主として次のような業務を受け持っています。ナショナルデータベース、文献データベース、テクノロジー・アセスメントセンター、フェロー

シップ・プログラム、地域間ネットワークなどです。

もう1つのリーダーであるアメリカはどうでしょう。ミュージアム・コンピュータネットワーク (MCN) がおよそ20年以上前から、博物館情報の自動化とネットワーク化を始めています¹²⁾。数年以上にわたって、公益団体として活動しており、その規模も国際的なもので、400名以上の会員を有しています。すでに昔のことになりますが、メキシコで開催された初めてMCN大会のことをいまでも私は覚えています。それはネットワーク化に熱狂的なジェーム・リトバック・キング博士 (Dr. Jaime Litvak King) によって専門家に紹介されたものでした。現在のところ、ゲッティ・アート・ヒストリー・インフォメーション・プログラムも同様な活動を推進しています。アメリカだけではなくラテンアメリカにとっても重要な機関です。

さて、アジア太平洋地域に目を移してみましょう。1991年にはカナダで博物館ドキュメンテーション研修講座が開催されています。これはカナダ国際開発局の東南アジア諸国連合 (ASEAN : Association of Southeast Asian Nations) に対する援助によるものです。しかし、残念ですがこれ以上詳細に述べることはできません。

4. 国際機関：ユネスコとICOMの役割

最初にお話ししたように、今日の博物館は今世紀末にはさらに大きな可能性を持つようになりますし、同様に非常に大きな責任を負うことにもなります。これは世界的規模で進むと予想されますし、最近の文化情報の分野では特にそうなっています。博物館の専門機関同様、CIDOC と国際博物館会議は、先端技術や電子情報システムの世界に入ろうとしている現在、特に重要な役割を担っています。しかし、この拡大しつつある技術的世界の中に飛び込む前に、私たちにとって解決しておかなければならない問題があります。それは、現在の状況「アンバランス」と「不協和音」です。

博物館ドキュメンテーションは周知のように、ものすごい勢いで技術的に開発されています。しかし、

それぞれのプロジェクトはほとんど関係がなく、独立的です。組織的なコーディネーションの方針が欠如している点は、今日のドキュメンテーションのおかれている状況といっても言いでしょう。国際博物館会議の政策や文化的な政府機関の政策はラテンアメリカにとって役立つもののでしょうか？あるいは、他国の政策あるいは地域の文化政策を包含しているものなのでしょうか？この点については私は答えることができません。しかし、国際博物館会議や CIDOC ドキュメンテーション委員会はこの問題について深く考察していただきたいと思いますし、同じ様なゴールを目指す博物館、国、地域圏などすべてにとって利益が生じるよう努力していくべきだと思います。

5. インターネットと文化政策

ところで、博物館は情報源として当然のことにように考えられています。しかし、つい最近までは、情報産業の分野では、博物館はそれほど重要なものであるとは考えられてきませんでした。今まさに、電子的にも、文化的な情報がスーパーハイウェイによって世界を駆けめぐる時代になりました。この技術のおかげによって、博物館は「ホットな資源」になったのです。

L.E.シャーウッド (Lyn Elliot Sherwood) はこの状況を次のように正確に指摘しています。「博物館は理論的（仮想的）だけでなく、具体的（現実的）にも、情報資源が豊かである。博物館資料に隠された根底にある情報、そして博物館に備わっているドキュメンテーションの観点に立てば、博物館は常に情報の宝庫であり続けてきたし、今後もその地位を守ることであろう。博物館は新しい情報伝達の方法を利用しながら、情報のプロバイダーとして活動していくのである。」

シャーウッドは何人かのドキュメンタリストと協力しながら、博物館が今日壁にぶちあたっている現在の状況と一連の新しい「状態」について深く考察しています。M. ブラッドリー (Merridy Bradley) は「現地点から我々はどこへ行くのか」と題する論文の中で情報産業に関して驚異的な数字を示し、次

のように述べています。「1970年代における情報産業の経済的傾向は次のような結果であった。つまり、先進国はヨーロッパ諸国、北アメリカ、そしてアジアの順であり、これらの国々の国内総生産も14.2%から25.8%の間で推移していた。博物館情報は重要な情報源であるにもかかわらず、情報産業は経済的にそれほど重要な役割を演じていなかったのである。」これが20年前の状況だったのです。

現在、アメリカはラテンアメリカに映画、テレビ番組、ビデオなど電子情報を販売しています。たとえば、メキシコは1990年には輸入者として16位でしたが、1993年には10位にまで上がっています。これは3,690万ドルに相当する投資額です。

さて、世界で最も大きいコンピュータネットワーク、インターネットは情報スーパーハイウェイのプロトタイプですが、どのような種類の情報でも机の上に置いてある小さなコンピュータから世界の人々と情報をやり取りすることができます。無数のコンピュータと結ばれ、大学系、政府系あるいは他のネットワークもインターネットに結ばれています。「タイム」誌によれば、2,500万人のコンピュータ・ユーザーが接続されていると言います。インターネットは、コマーシャル的利用のほかに、文化的、教育的な用途にも利用できる可能性があります。つまり、このことは、伝統的な博物館の使命が問い直され、非常に複雑な倫理上の問題を起生させているとも言えるのです。私はこの問題に対処できる方法はたったひとつしかないと考えています。それは「意思決定の重要性」です。電子的情報の実現に関して体系的に研究する必要があるわけですが、近い将来、これらの情報が博物館とどのように結び付くのか、あるいは教育の核心部分とどのような関係を持つのか、が研究されなければなりません。これに基づいて、それぞれの政府機関や研究組織から提案されている勧告や提案などをスタートさせるべきだと思います。このようなことを制定することは非常に難しいことだと思います。しかし、共同作業を通して、あるいは、意思決定者が行動する前に協力しながら様々な段階で努力してみることが大切なのではないかと思うわけです。

ラング氏が言うように、国際的な事業として実行していかない限り、博物館が情報・教育・コミュニケーション機関の状態を維持することは不可能です。特に今日のような巨大企業と博物館が争うというのは不可能なことです。この意味で、国際博物館会議、ユネスコ、ASEANのような文化的な機関が果たす役割はきわめて重要になってくるでしょう。

一方、文化的な目的のため、特に博物館のため、情報技術によって自動化できる可能性はきわめて高いといえるでしょう。Getty・アート・ヒストリー・インフォメーション・プログラムがアメリカの国内経済委員会に提出した論文によれば「ヨーロッパは経済開発のためにその文化的情報を使用することを学びつつある。欧州連合の文化情報データベースの開発プロジェクトはテレコミュニケーション開発が目的である。これは学習を基礎として文化情報の複雑性を発展させていくものである。たとえば、多くの国が協調しながら進めているデータベースがそれである。しかも、教育と観光の両面においても技術移転を検討している」のです。これに関連して、人類学者であり、情報工学者であるネストール・ガルシア・カンクリーニ（Nestor Garcia Canclini）は最近の記事で次のように発表しています。少し引用してみましょう。

「ヨーロッパの新自由経済改革は、テレビ、ラジオ、など情報系の公営企業を民営化させた。ある国では、公権力を縮小せざるを得ない場合も生じている。たとえば、文化遺産（博物館、考古学遺跡等）の保護、伝統芸術（視覚芸術、音楽、劇場、文学）の促進などの分野がそれである。様々な文化事業が観客を失い、政府が政策的に文化領域に息吹をそそがなければ、生き残りは非常に難しくなる。一方、新技術と結び付いているコミュニケーションメディアや情報系メディアは莫大な投資が必要になるが、さらに多くの観客を得ようとすると外国企業に振り向かざるを得ない。多くの場合、それはアメリカと日本はそうようにしている。」

では、ヨーロッパのように先進国ではない場合は、どのようなのでしょうか？ガルシア・カンク

リーニによれば、ヨーロッパもラテンアメリカと同じように、文化のマスメディア的再編成という問題に直面しているのです。

もうひとつの問題は、今述べた問題に伴って生じてくるわけですが、博物館情報の自動化という問題が起こってきます。つまり、このオートメーション化は国ごと、博物館ごとに不均衡の状態にあります。私が今話をしているこの新しいテクノロジーによって、多くの博物館は最先端技術から放置されていくことになります。

少数の国が情報化を集中的に進めると、貿易的に不均衡になる可能性がでてきます。同様に、情報依存型の国家になると、その主権についてさえも懸念されるようになってきます。ラテンアメリカではこの問題に関して既に議論されています。「地域化」対「グローバル化」は密接な関係があり、しかも文化的なアイデンティティの一部となっている文化遺産は情報ネットワークと深い関係があること、それ故に、非常に重要であることと考えられています。ラテンアメリカ圏の多くの国にとって、文化は特に社会的思考性の強いものであり、文化的な国家として向上していくために政府の取り組むべき重要課題のひとつとなっています。

メキシコではこのことを証明するかのようにより、具体的な事実として、教育と文化は国の事業として一番優先順位の高いものになっています。具体的に言いますと、メキシコの博物館の90％は国有となっています。しかも、考古学博物館と歴史遺産、遺構はすべて国立人類学研究所（National Institute of Anthropology）によって管理されています。

6. 結語：文化政策とネットワーク化に向けて

先端的な技術が与えるインパクトについてメキシコの人類学者は既に分析しています。メキシコ人にとって、情報システムやマスコミュニケーションがどのように作用するかを調査した上で、次のように人類学者は結論づけています。つまり、地域圏の公益と商業活動とどのように結び付けるか重要で、こ

れこそメキシコの必要としている文化的ニーズである、と。この目的のために、私的な関心事項やビジネスと国の所有する文化的情報とを関連づけるかが問わなければなりません。この問題は当然、国家の文化政策の中で検討されるべきでしょうし、調整されるべき課題でもあります。自由貿易協定と地域圏統合化協定が真の意味で文化産業に貢献できるようになるには、まずはじめに文化振興政策が確立されなければなりません。繰り返しますが、国際的な機関 ICOM や主唱者としての CIDOM の役割、そして地域圏における文化事業推進機関の果たす役割は非常に重大です。セミナーやワークショップを通して、ドキュメンテーション分野、情報科学分野における博物館スタッフの研修を推進していくことも今後は重要になってくるでしょう。

どのようなネットワークでもそうですが、特に博物館のような文化情報を扱うネットワークは世界のどこからでも情報を受けとる権利を保障すべきですし、逆に多様化された地域独自の伝統文化が存在することを認識した上で、ラテンアメリカからも世界へ情報発信できるように準備しておかなければなりません。インターネットはこの情報発信と受信を可能にしめる強力な武器となっており、その威力をますます発揮することでしょう。

(以上)

注

- 1) Boylan, Patrick, Review of the Convention for the Protection of Cultural Property in the Event of Armed Conflict, UNESCO, 1993
- 2) Arjona, Marta. Patrimonio Cultural e Identidad. Editorial Letras Cubanas. Cuba, 1986
- 3) Herman Yani, 「MUSEOS Y POLITICAS CULTURALES (博物館と文化政策)」チリ・サンディアゴ大学講演、1992年9月
- 4) Bradley, Merridy ; Where do we go from here? MUSE. Spring/1991
- 5) 原語では、intra-muros (ラテン語で、城壁内に、という意味)
- 6) Roberts, Andrew ; Chairman's Report, Newsletter. CIDOC Vol.1. No. 2., 1990
- 7) Homulus, Peter ; Collective approach vs individuality of museums, Newsletter CIDOC. Vol. 1 No. 2. 1991
- 8) Handbook of Standards. AFRICOM Programme. ICOM. UNESCO 1994
- 9) Canadian Heritage Information Network については、次の論文を参照のこと。
水嶋英治「北米における保存情報ネットワーク」『情報の科学と技術』1992. Vol. 42., No. 7., p635-641, (社) 情報科学技術協会
- 10) Crespo Toral, Hernan. La Documentation y Registro des Patrimonio Cultural America Latina y el Caribe. Memorias des Primer Coloquio sober Documentation de Obra en America Latina y el Caribe. Coordinadora ; Yani Herreman. SNIC/CNCA. sin publicar. 1992
- 11) Lang Rottenberg, Barbara. Proposals to encourage the transfer of museum data between countries. Newsletter CIDOC
- 12) ミュージアム・コンピュータネットワークは1972年から活動を開始している。